

中国と日本の大学生における価値観の比較文化的研究

—尺度構成を中心にして—

鄭 曉 齊

価値観は、心理学、社会学、人類学などの分野においてさまざまに定義され、概念上混乱している。本研究では、価値観を主体の側の、人間精神面の意識構造の要素として用いる。また、日本と中国で価値観の比較文化的研究を進める場合、日常生活で個人にとって重要と考えられる一般化された行動様式といった価値観の操作的定義を採用する。

価値観は人間を理解する key concept として、長い歴史を持つ研究分野の1つである。しかし、1950年代以降、中国と日本の比較を中心とする価値観の心理学的研究は皆無である。そのため、両国の青年の価値観の異同、また価値観の測定方法については明らかではない。同じ東洋文化圏に属する日本と中国は、現在、政治、社会体制、経済発展の程度などのあらゆる面において異なっている。こうした現状を考えると、日本と中国で比較可能な価値観の測定尺度を初めに作成する必要があると思われる。

また、従来の価値観の測定方法などの問題点を考慮し、まずもっとも基本的であり、また重要と思われる価値観の諸側面に注目することが、より望ましいアプローチになると考えられる。

そこで、広い範囲にわたって、中国と日本の青年の価値観の多面的な特徴を次元化して、信頼性、妥当性を持つような測定尺度を構成した上で、両国の青年の価値観の異同点を明らかにしたいと思う。

調査 I

本研究の最初の段階として、価値観の構造における2つの主要要素である個人的価値観と対人的価値観を中心として、中国と日本の大学生の価値観について比較していきたいと思う。

菊池、Gordon (1970) の個人的価値観調査用紙 (Survey of Personal Value, 以下SPVと略記) と対人的価値観調査用紙 (Survey of Interpersonal Value, 以下SIVと略記) を用いて、500名 (男女それぞれ250名) の中国の大学生と440名 (男子183名, 女子257名) の日本の大学生に対して調査した。

その結果、SPVとSIVの信頼性を検討するため、各下位尺度別に α 信頼性係数を算出したところ、全体と

して、日、中のどちらにおいても高い値を示しているが、SIV内の“独立”尺度については、やや問題があるようであった。これは、質問項目の表現のあいまいさなどに起因していると思われる。

また、SPVとSIV別に因子分析したところ、日、中の両方において、原版に仮定された下位尺度がほとんど因子として認められ、類似した因子構造が見い出された。

しかし、菊池、Gordon のSPVとSIVの構成についていくつかの問題があることも示された。例えば、質問項目の数、表現のあいまいさなどによって、調査の結果が強く影響されていると思われる。

調査 II

SPVとSIVの構成概念、質問紙の構成などの問題を考慮すると、中国と日本の比較に焦点を当てる場合に、SPVとSIVを修正する必要があると思われる。

そこで、改めて理論的、経験的な角度から、価値観の枠組みを考え直し、SPVとSIVを再構成したいと思う。

そこで、まず、従来の価値観に関する研究などを参考し、質問項目を集め、主として心理学専攻の大学生21名に対して項目選択のための予備調査をした。さらに、修正、検討を加え、141項目を選択した。

このようにして作成された価値観の調査用紙を用いて、367名 (男子156名, 女子211名) の日本の大学生に対して調査した。

いろいろな角度から、データを分析した結果、少数の項目に表現、内容などに起因していると思われる問題があることが明らかにされた。そこで、問題のある20項目を排除し、残りの121項目について因子分析した。その結果、個人的価値観と対人的価値観で、それぞれ6因子、7因子が抽出された。あまり明確な解釈のできないものもみられるものの、全体としては、今後の研究で抽出されることが予想される因子に関連する項目が選択されたといえよう。

しかし、いくつかの下位尺度の α 信頼性係数が低く、さらに厳密に項目選択を行う必要があるだろう。

調査 III

調査 II で選択された 121 項目を用いて、中国の大学生 398 名（男子 243 名、女子 155 名）に対して調査した。それと同時に、構成される価値観の測定尺度の妥当性を検討するために、Rokeach (1968) の目的価値観と手段価値観という 2 つの部分からなる価値観調査用紙（以下 RSV と略記）を実施した。

調査のデータについて、項目分析、項目間の関係、因子分析などのさまざまな検討をした上で、日本と中国の両方において問題があると思われる 40 個の項目を排除した。そこで、個人的価値観 38 項目と対人的価値観 43 項目、合計 81 項目を選択し、TEI 式の SPV（以下 T-SPV と略記）と TEI 式の SIV（以下 T-SIV）を構成した。

T-SPV と T-SIV ごとに、因子分析し、それぞれ 6 因子を抽出した。これらの結果は、ほとんど予想と一致し、中国人の特徴、あるいは東洋人の共通点を表していると思われる。また、各下位尺度の α 信頼性係数は、.60～.86 までの高い値を示し、尺度内に一貫した関係があることを示している。

さらに、T-SPV と T-SIV の構成概念的妥当性を検討するために、T-SPV と T-SIV の各下位尺度の平均得点と RSV の目的価値観と手段価値観に対する Q 因子分析の因子負荷との相関係数を求めた。そこで、有意水準に達した相関係数は、いずれも経験的、理論的に妥当なものであった。

RSV と T-SPV、T-SIV との関係をもさらに明らかにするため、RSV において特徴のある一部の被験者を選び、T-SPV と T-SIV の各下位尺度の平均得点の特徴を調べた。

これらの分析によって、T-SPV と T-SIV が、全体として中国の大学生にあてはまることが示された。

調査 IV

構成された T-SPV と T-SIV について、日本の大学生を対象とする妥当性検証調査を行った。そのため、T-SPV、T-SIV と RSV を用いた。被験者は、日本の大学生 402 名（男子 169 名、女子 233 名）であった。

その結果、T-SPV と T-SIV 別に、因子分析により、それぞれ 6 因子が抽出された。全体として、調査 III の中国における調査と同じ傾向の結果が得られたが、抽出された因子、また因子とそれぞれの項目との対応関係において異なる点も見られた。また、各下位尺度内の α 信頼性係数を算出した結果、各下位尺度に内の一貫性があることが示された。

調査 III と同じ方法により、T-SPV と T-SIV の構成概念的妥当性を検討したところ、T-SPV と T-SIV の構成尺度は、ある程度日本の文化の中で、構成概念的妥当性を持つことが示唆された。

討論

調査 IV と同じ質問項目からなる調査が中国の大学生に対して、実施できなかったため、現時点で、直接、日本と中国の大学生の価値観を比較するには若干資料不足である。

そこで、調査 III で最終的に選択された 81 質問項目の資料と調査 IV の資料に基づき、日本と中国の大学生の価値観の因子構造を中心にして比較した。

個人的価値観について、“秩序・計画性”は、日、中の両方で第 1 因子として抽出され、東洋文化、東洋人の重要な価値観と考えられる。その他に、東洋文化の伝統的な特徴として、“自己統制”因子が抽出された。日本の大学生では、“持久・責任感”と“実際・合理性”がより重視されているのに対して、中国の大学生の方が、“新奇性・多様性”因子により大きな価値を置いている点で特徴がある。

個人的価値観に比べ、対人的価値観の因子構造に、日本と中国の大学生間の相違点が多くみられた。

他人に助けってもらったり、他人のために考えたりする“親和”因子は、特に日本の大学生においてもっとも重視され、one-way でなく、both-way といった対人関係の特徴がある。また、中国の大学生では、“自己顕示”を表すと考えられた項目が“愛他”因子に入り、中国の大学生の独特の対人行動様式が示された。

さらに、“指導・リーダー”、“承認・自己顕示”は“愛他”次元と密接した関係にあることが示され、東洋文化の中で特徴のある対人行動指向を表している。

中国の大学生に比べ、日本の大学生の方が個人の独立性をより重視していることが、因子構造からみられた。これは、安藤 (1974)、日野 (1978 a, 1978 b) などの研究にみられた日本の青年の価値観の成長傾向と一致している。

以上のように、調査 I から調査 IV までの一連の調査により、日本と中国の大学生で比較可能な価値観の測定尺度 (T-SPV と T-SIV) を構成した。このように作成された尺度は、質問項目が日、中の大学生にとってより適切であり、また信頼性が高いと同時に、構成概念的妥当性を持っている。さらに、構成された価値観の次元、下位尺度は、東洋文化、東洋人の共通点をより明らかにするとともに、中国と日本の大学生の価値観のそれぞれの特徴を表すことができると考えられる。